

地に消える 少年鼓手

ウィリアム・メイン 作
林 克 己 訳



933 メイン, ウィリアム

地に消える少年鼓手

ウィリアム・メイン作, 林克己訳

岩波書店 1970

288p 23cm (岩波少年少女の本 12) 小学 5, 6 年以上

(参考) Mayne, William : Earthfasts, 1966.

岩波少年少女の本 12

地に消える少年鼓手

定価七〇〇円

一九七〇年十月二十日 第一刷発行©

訳者 林 克己

発行者 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

岩波雄二郎

印刷者 長野市中御所二ノ三〇 田中忠

発行所 東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五

株式会社岩波書店

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 株式会社三水舎

表紙・箱印刷 錦印刷株式会社

地に消える少年鼓手

ウィリアム・メイン 作

林 克 己 訳



岩
波
書
店



EARTHFASTS

by William Mayne

Illustrated by David Knight

1966

Original English language edition published
by Hamish Hamilton Ltd., London

Text © 1966 by William Mayne
Illustrations © 1970 by David Knight

This book is published in Japan by arrangement
with the author through Charles E. Tuttle Co.
Inc., Tokyo and Iwanami Shoten has a sole right
to the illustrations.

もくじ



第一部

作者のことば…………… 9

この、長い長い夜

1 少年鼓手、姿をあらわす…………… 13

2 少年鼓手、仲間をさがす…………… 24

3 少年鼓手、昔話をする…………… 36

4 少年鼓手、故郷へ帰る…………… 47

5 故郷の村で…………… 58

6 少年鼓手、また地下にもぐる…………… 69

7 奇妙なろうそく…………… 81

第二部

立ち石の遺跡

1 ジングル岩、動く…… 95

2 動いた岩を見に行く…… 105

3 走りまわる犬の群れ…… 115

4 目に見えぬ妖怪…… 126

5 つぎつぎにおこるふしぎな事件…… 136

6 盗まれたブタを追って…… 147

第三部

ウサギの道で

1 ろうそくの炎のあやしい力…… 161

2 また会った巨人と、目に見えぬ妖怪…… 171

3 デイヴィッドの身に何がおこったか…… 182

4 デイヴィッドはもう帰ってこない…… 194

5	ひとりのこされたキース……………	204
6	査問会……………	214

第四部

	火と、部屋と、ろうそくの光と	
1	キース、ふしぎな馬に会う……………	231
2	キース、幻の軍隊を見る……………	237
3	アーサー王、姿をあらわす……………	247
4	地下の世界で……………	258
5	ふたたび地上に帰る……………	272
	あとがき……………	283

さし絵

デイヴィッド・ナイト

地に消える少年鼓手

林 ウ
イ
リア
ム・
メ
イン
作
克
己
訳

作者のことば

——日本の少年少女のみなさんへ——

日本とイギリスはいろいろな点でよく似ています。どちらも長い歴史をもった島国ですし、いまはおなじように、気ぜわしい近代国家になってしまっています。そうして、国民は毎日、未来につながるをもっていると同時に、過去とも縁をたちきれない生活を送っているのです。つまり、昔の習慣とか、昔の伝説とか、伝統とかに、ですね。とくに伝説については、むろん両国にそれぞれがった点はありませんが、その材料はけっきょくおなじものといえます。武勇伝だの、あぶない橋をわたるような、勇敢な昔話だの、それに、魔法だの、怪物だの、といったしろものです。

この物語のなかには、みなさんに耳新しい話もあれば、また、どこかで聞いたことのある話もあると思います。イギリスの読者には、ここに出てくるアーサー王について、ことさら説明する必要もありませんが、みなさんはきっと知りたいと思うでしょう。

アーサー王というのは、ずっと昔の英雄で、何千年もまえからその名が知れわたっています。何千年はすこし大げさですが、何百年このかた、といえばまちがいありません。王の剣の話もあり有名です。死んでしまったともいわれますが、また、いまもなお眠っていて、ひとたびイギリスが立てといえば、もう

作者のことば

いちど目をさますのだともいい伝えられています。

アーサー王と、王の騎士たちが眠っていると思われる丘は、イギリス国じゆういたるところにあります。この物語に出てくる城もそのひとつで、王が目をさます機会を待ちながら、地下で眠りつづけていることになっています。ここはわたしがいま住んでいる所からそう遠くないのですが、何百年かまえに、ひとりの少年鼓手がその地下の通路へもぐりこみ、その太鼓の音をたよりに、仲間たちが地上を追いかけたのだそうです。しかし、しばらくして太鼓の音はやみ、それっきり少年は地上へ出てきませんでした。またべつのときに、地下の道へはいっていった男がいて、ちようどアーサー王と騎士たちの眠っている場所にぶつかりましたが、運わるくみんなを起こしてしまい、命からがら逃げだして、それからというもの、その場所についてはわからずじまいになったということです。これが、この物語の背景になっている「実話」なのです。

一九七〇年春

ウィリアム・メイソ

第一^{だい}部^ぶ

この、
長い長い
夜

1 少年鼓手、姿をあらわす

夏のおわりの、あるたそがれどき、八時半。このころは人が寝しずまるずっとまえに日がしずみ、人の起きるずっとまえにまたのぼる。暑い晩だ。ウォーカーの山の端におちかかる太陽は、せまい谷間に雲のヴェールをひいていく。

ゲアブロウの下にひろがるホウバンクの森では、葉に似たかくにつつまれたハシバミの実がまだ青くてもかたい。なかの乳液が熟していないから、あいかわらずにがいまだ。森のはずれの黒イチゴは、ひげのはえたつるにぶらさがり、この暑い天気につきり熟して、口をあけている。イチゴの熟すのはあたりの空気のせいだが、ハシバミのほうは木の根しだいだからだ。

ホウバンクの森は丘の斜面をしめていて、原っぱのほうへ急勾配でなだれおちる。下のはしには防塁があつて、さらにその下の野原につづき、上端は背の低い木立ちから、きりたった崖になつてゐる。崖の上には長さ一キロほどの岩だながあり、そこからまた急な斜面がゲアブロウの岩山のてっぺんまで一気にかけあがる。その岩山の上は何キロもひろがる岩の高原で、はるかヴェンデイル山の南面をくぎっている。イチゴつみの人たちは、バスケットやミルクカンや帽子にイチゴをいっぱい詰めこんで、たそがれのかを町のほうへもどってくる。こどもたちも黒イチゴをたべながら、歓声をあげて丘の斜面をおりてくる。そうして、町の入口で遊んでから、めいめいじぶんの家へ帰っていく。窓々に灯がともりはじめ、暑い、

甘いそよ風の息吹きが丘の頂上からわたってきて、もやと牧場の草の上に大きな露の玉をやどす。風は町の上を吹きすぎ、教会の人が礼拝にならず鐘の音を市場のほうへ運んでいく。こんやは金曜の晩だから、鐘は九時までなりつつけるはずだ。

男の子がふたり、まだホウバンクの森にいて、赤や白の野バラのなかに立っていた。まだあかるい北西の空に面した森のはずれで、昼と夜の交代するこの時刻に、花はいっそう光り輝いている。ふたりはバラの花のそばに立っている。何かを見つけたふたりのうちのひとりが、この花を目じるしにしておいたからだ。

「たしか、このすぐそばだ。」と、キース・ヘーセルタインがいった。

「じゃ、そとと歩け。」と、デイヴィッド・ウィックスがいう。「もしアナグマだったら、おどろいて、にげだしちゃまずいだろう。」

「きのうは平気だった。ぼくがすごい勢いではねまわっても、むこうはあいかわらずおんなじ音をたてていた。」

まえの日、物音をきいて、何かいるのに気がついたという、森のはずれのそのあたりを、キースはしきりにさがしている。そんな音をだすものはいくともおりも考えられる。まず、アナグマの音だ。やつらは森のなかを縦横に掘りかえて、地下にも地上にも通路をつくる。アナグマのハイ・ウェイはやつらの町からまわりのいなかへつうじている。地下道の一本ぐらひは、この牧場の地面のすぐ下をぬけているかもしれない。物音は、またウサギのせいのこともある。たとえば、ウサギのあいだに疫病がはやって、病気の

仲間をみまいにいく、おとなしいウサギの足音といったところだろうか。しかし、いちばん考えられるのは水の音だ。この石灰岩の土地では、地下を水が流れ、その下にある岩の形しだいで、水はふかくもぐったり、地上にわきでたりする。そのとき、キースは物音をアナグマのせいだと思い、デイヴィッドは水にちがいないと思った。いまいるこのあたりの原っぱはハイ・ケルドとよばれていて、ケルドというのは泉という意味だからだ。

しかし、物音にしては大きすぎた。それに、そのへんは草がもりあがって、小さな盛り土になっていた。「水さ。」と、デイヴィッドがいった。「そう思わないか？ 地質学的に説明するのがいちばんかんたんだ。いつもいちばんかんたんな説明をしておけば、まちがいないのさ。」

「そうとは限らない。」と、キースがこたえる。「理論は単純なほどいい。だが、理論は説明にはならない。」

「ぼくのは正確じゃないさ。それに、その物音というのをまだきいちゃいないんだ。」

「とにかく、幻をさがしてくれ。あの盛り土のかけかもしれない。そいつがぼくのさがす相手なんだ。」
「あれはきつと古墳だろう。なかががらんどろで、上にのるとおちこむかもしれない。」

「ことによると、でかいキノコだぜ。」と、キースがいう。「だが、きのうもあれを見たし、音もきいた。ちょうどこの二色のバラの下だった。とにかく何かきこえたら、だまって、耳をすましてくれ。」

草のもりあがった、その小山が前方に見えた。アリやモグラがこしらえた盛り土ではない。そういうものはまっすぐ上にもちあがっている。この盛り土は、地面からもちあがったというより、むしろ横におし